

季刊

連句

第41号

平成五年六月一日発行



K氏からの手紙（南柏雑記39）	1
半歌仙「初昔」の巻異論	東 明雅 … 2
「灰汁桶の」の巻 鑑賞（Ⅲ）	東 明雅 … 6

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第四十五回 猫蓑会	9
---------------------------	---

第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第

二十韻「藤祭り」 捌・文 副島久美子

第二部 二十韻 十卷 捌 東 明雅・岩井啓子・真田光子・杉内徒司
杉江杉亭・副島久美子・橘文子・中島啓世
中田あかり・若尾よしえ

文 内田麻子・中田あかり

「馬追」付勝練習二十韻	東 明雅 … 18
-------------	-----------

A・C・C「連句入門」講座紹介

発句の練習 …… 秋元正江 … 20

連句の成立ち …… 式田和子 … 22

付勝二十韻「飛行船」…… 捌 秋元正江 … 23

歌仙三巻 捌 東 明雅・杉内徒司・秋元正江	24
-----------------------	----

芦丈翁俳諧聞書（Ⅷ）	26
------------	----

二十韻三巻 捌 田村満子・岩垂景翠・本田八重子	28
-------------------------	----

新刊紹介	25
------	----

雁帛往来	29
------	----

K氏からの手紙
南柏雑誌 39
雅

「拝呈 このたび猫蓑作品集Ⅲを御惠送いただき、恐縮に存じます。

二十韻『躁鬱』の巻なつかしく再見しました。若い人達の作品中に置かれると、稍クラシカルですね。私を對手とする両吟では致し方ないことですが――

序文中の、「近ごろは連句を遊びとだけ考えて無心所着、付味も転じも考えない作品」が多くなつたとの御指摘、最もわが意を得たりの感があります。

手許の連句年鑑十冊をざっと眺めても、いまだに目を蔽いたくなるような作品が多いのは困つたことです。

このごろ考えているのですが、素人の遊芸とプロの宗匠との中間に、スペシャリストとしての一縷の白道があるだろうということですが。私も明雅先生に負けないで、芭蕉翁に西三十三箇国の俳諧奉行と言われる位に精進したいものです。古稀をむかえての私の覚悟です――後略――

右は関西に住む私の心友K氏からの書簡の一節である。猫蓑が連句年鑑から脱退して、毎年独自に「猫蓑作品集」を刊行し、今年で三年に及んだその真意を理解して下さる有難い手紙である。問題はどのように私たちの真意を理解して下さる人が、この天下にまだ極めて僅かという点に存

在する。

現代の連句は、大正から昭和初年にかけて一部の好事家が、芭蕉からの伝統も知らずに自己流に始めたものが、その弟子、孫弟子どもによりさらに歪曲された形で、時を得顔にはびこっているのである。現在、連句の作者という人の大部分は、はっきり言えば子規とか虚子とか、俳句の道ではえらいだろうが、連句ではその伝統はもちろん、原理も知らなかった者の弟子、孫弟子たちで占められている。これでは芭蕉が折角一生をかけて完成した俳諧とは、全く別物になってしまっているのは、むしろ当然ではないか。

連句年鑑十冊が目を蔽いたくなるような作品でみちみちているのも当然であるが、現在の連句界でこのことに気がついている人もすくないというのもまた事実である。

私は今までこのような現状に対して、あまりにも寛容でありすぎた。これからは本誌に掲載した「半歌仙『初昔』の巻異論」のように、目についたおかしい作品については遠慮会釈ない批判を加えたいと思う。これによって私は多くの人から憎まれ、怨まれるであろう。しかしながら、喜寿を過ぎた余命を考えると、のんびりしてはおられない切迫した気分が、私を駆り立てるのである。それは、一部の連句人の憎しみの的になつても、芭蕉の残したすばらしい俳諧という芸術をそのまま後世に伝えたいからに外ならない。

半歌仙「初昔」の卷異論

東 明 雅

平成五年一月二十四日、現代連句シンポジウム「現代詩人による公開連句実作と討論」が東京九段下のホテル・グランドパレスで開催された。パネラーに高橋睦郎・水野隆・別所真紀子・小沢実の諸氏、司会は川野蓼艸氏・山地春眠子氏で、半歌仙（八句目までは下俳諧）が興行され、その経過・結果は「俳句研究」四月号に発表されている。

私は当日、他に所用あって出席できなかったが、この報告を読んで疑問に思う点があるので、その一端を後ればせながら、捌きの水野氏に御質問したい。お答えいただければ幸いである。

まず、この巻の発句から第三までを一読して、

初昔雅は色を好むより

睦郎

化粧はつかに水仙の空

隆

屋上に子猫と月と笛吹きと

真紀

季の取扱ひ、その他に奇異の感があったが、これについては、司会の川野氏が直接その場で水野氏にたずねておられるので、以下、それを引用する。

川野 ……今日はウラの三句目から始まるわけですが、ここには連句界の鬼の姑や鬼の舅がたくさん集っております。まず、パッと見まして、発句は正月で脇句は冬、

第三は八仔猫で春と、支離滅裂ではないか、というご意見が真っ先に出るのではないかと思います。

その点について、捌の水野隆さん、お願いいたします。
水野 初昔雅は色をこのむより

化粧はつかに水仙の空

発句は高橋さん、脇は私です。たしか元禄二年に芭蕉の巻いた「水仙はの巻」という一巻があり、八水仙は見る間を春に得たりけり路通八窓のほそめに開く歳旦季杏八我猫に野良猫とをる鳴侘て 翁八が最初の三句ですが、最初八水仙で、わざわざ春と断ってありますから「春」、続いて八窓のほそめに開く歳旦で「正月」です。そして八野良猫通る鳴侘で、「とをる」は通ってくるといふ意で恋猫、春です。昔はこういう俳諧もあるわけです。旧暦では正月も春ですから、きょうは旧暦での春三句で現代的な考え方では少しばらばらな出だしにしました。

これでまず、現代連句において、旧暦で作られた明治以前の歳時記と新暦による現代の歳時記とを同じ一巻の中で併用してよいか、否かが問題である。というのは、この巻ウラの六句目・七句目・八句目にわたって、季戻りの説明

がある。

ウラ六句目 まづ箸付ける飯のぎんなん

ウラ七句目 ふところに骰子入れて月の山

この句に對して、「をとこと西瓜いつもはづれる」という句を付けたのに對して、

— へぎんなんは晩秋、へ西瓜は初秋で、季戻りになりませんか。

川野 季戻りについて初めての方に説明しておきます。

歳時記では「ぎんなん」は晩秋、「西瓜」は初秋になっています。そうすると、晩秋から初秋に戻るのではないか、こういうのを季戻りといひましていけないことになっていきます。

とあるが、へぎんなんを晩秋、へ西瓜を初秋というのは、現代の歳時記によつてゐるわけで、明治以前の歳時記、ことに、芭蕉らが用いたと思われる古い歳時記では、へぎんなんは仲秋であり、へ西瓜は旧曆六月であるから晩夏である。だとしたら、この一卷では、ある場合には旧い昔の歳時記を用い、ある場合には新しい現代の歳時記を用いてゐることになる。

このようなことは不都合というより、捌くその人が大変である。ビルを建てる時、メートル法の物指しと日本古来の尺貫法による物指しとを混用するようなもので、その不可なることは申すまでもあるまい。発句の「初昔」を春の句と考へることは誤りである。許されないことである。

次に同氏は脇の句「化粧はつかに水仙の空」について、

元禄二年に芭蕉によつて巻かれた「水仙はの巻」の例を証拠に、春の句としておられるが、「水仙」は「はなひ草」

以下、「俳諧初学抄」・「毛吹草」・「山之井」・「増山井」・「番匠童」など、芭蕉が使つたと思われる歳時記には、すべて、十一月又は初冬となつてゐる。これが明治以後の新しい歳時記では晩冬となつており、ともに、絶対に春の季語ではない。元禄二年の歌仙の発句「水仙は見る間を春に得たりけり」とは、水仙は冬の季語であるけれども、

花の季節が長いので、春を迎えてもお花が見られるという意味であり、この句が春になるのは、「春に得る」という詞があるからに外ならない。

水野氏の脇の句「化粧はつかに水仙の空」とは、水野氏の自解によれば、「水仙の咲くころの空がかすかに化粧したようだ」という意味であるという。ただそれだけならば、この句は絶対に春の句にはなりえないだろう。

さらにこの脇句については、別に問題がある。「俳句研究」の文を更に引用すれば、

— 脇句がへ化粧はつかに水仙の空なのですが、へ化粧に恋句のような感じが許されるかどうか。オモテ六句にそういう感じが許されるかどうか。

という質問に對して同氏の答は、
水野 まず発句がへ雅は色をこのむよりと、すでに恋句なんです。ですから発句をうけて、恋句であつて、なおはつきりと恋らしくない句を付けたつもりです。空がかすかに化粧したようだということで、恋句とはいえない

いと思いません。

となつてゐる。水野氏が発句を恋句だと見られたのは正しかった。それはそれでよいのであるが、それなら発句が恋句である場合、脇句はどうすべきか、ここを十分に御存知なかったのではあるまいか。「発句を受けて、恋句であつて、なおはっきりと恋らしくない句を付けたつもりである」と言われるが、なぜ、そのように余計な遠慮をされたのであろうか。蕉風連句では、表六句には神祇・釈教・恋・無常その他特に印象の強いものは遠慮することになつてゐるが、発句だけに限つては、この制約はないのである。発句は神祇でも釈教でも、恋でも、無常でも、あるいは地名、人名でも自由に出すことが出来る。そして、もし、発句に恋が出たら、脇では必ずこれに應じて、恋句を付けなければならぬ。たとへば発句が神祇であつた場合には脇も神祇で付け、釈教であつた場合には釈教で付けてもよいことになつてゐる。しかし、恋句の場合に限つては、恋は一句で捨てるなどという大原則があるから、発句が恋句の場合には、脇は必ず恋句を付けなければならないのである。それなのにどうして、水野氏は「恋らしくない句」を付けられる必然性があつたのか、最後に「恋句とはいえないと思ひます」と言われなければならないのは何故か。私とすれば、はっきりここで発句の恋の情を受け、二句相俟つて美しい恋句の一連を作つていただきたかつた。作つていただかなくてはならないところであつた。それを水野氏が殊更に避けて「恋句とはいえないと思ひます」と言われる

のは疑問であり、不満でもある。

次は第三の留めに関する問題である。まず、第三は大体に留め・て留め・らん留め・もなし留めなどの語で留めることに決つてゐる。そのことは、ちよつとも俳諧を齧つた人なら、皆承知してゐることだろう。

第三の留字がこのように定まつたのは、連歌の宗祇の頃からと言われているが、その前から、これらの形の留めが圧倒的であり、それがそのまま俳諧に伝わつて、嚴重に守られて来た。そして、その為に自然と一種の風格が生じ、百句の中に混ぜても、この形の留め方をしたものは丈高く第三であると、指摘出来、その反面、外の留め方を使えば、同じ句でも何か安っぽく、平句めいて聞える。たとえば、二番草取りも果さず穂に出る
股引の朝からぬるる川こゆる
などと言つた場合、意味は全く同じながら、

二番草取りも果さず穂に出で
股引の朝からぬるる川こえて
と比べてみれば、風格の差、いわゆる第三体としての形と意義とがはっきりするだろう。

ところで、何故にこの、て・に・にて・らん・もなしが使われるようになったか、これを説明したのが「俳諧無言抄」で、「脇の句は大体において文字留め（韻字留め）であるから、その続きに第三も文字留めが並んでは懐紙面が見苦しくなるから、て・に・にて・らん・もなしなどの軽い仮名で留めよ」と言うのである。そう言えば芭蕉七部集

の作品で、第三をて・に・にて・らん・もなし以外で留めたのは、すべて脇がてには留めの場合で、例外は僅か二つにすぎない(ひささ・猿蓑)。しかも、この二つはともに浜田珍碩の作品であるのが注目される。珍碩は何故にこのような異風を好んだのか、外の人たちはみな師の教えを守って、格外なことは誰もやっていない。

しかるに、現代の連句では、新をほこり、奇をてらうてか、理由もなく別の留め方をする人が多くなった。極端な例を一つあげれば、昨年の第七回国民文化祭石川大会で入選第一席の文部大臣賞を見て、

炎天を風のごとくに薄れゆく
簾の目より洩るる琴の音

卓上に放置されたる招待状

と、第三にわざわざ文字留め(韻字留め)が用いられている。この場合は脇の句も文字留めであるから、て・に・にて・らん・もなしの、普通の形に留めるのがあたり前であるのに、わざわざ、第三に文字留めを用いて、懐紙面を殊の外悪くしたのは何故であるうか。懐紙面というのは、脇・第三と同じ文字留めが並んで見場が悪いというだけでなく、発句の上五と第三の上五とが、いずれも、八炎天をV・八卓上にVとこれも似た形が打越になっているところにも問題があるう。これをひっくり返せば、

招待状放置されたる卓上に

となり、懐紙面もよくなるのに、なぜか、わざわざ、平句まがいの第三を作って、当人は新しさをてらうつもりであ

ろうが、全く逆効果である。

当人はあるいは第三の作り方など一切頓着しなかったのかも知れない。しかし、これが入選第一席に選ばれるとなると、撰者が撰者であっただけに、あたかも第三の留めの慣わしは守らなくてもよい。あるいは第三の留めなどは作品審査の条件にはならないと、天下に向って公表したような破目になり、大いに初心者を惑わした例がある。

これは結局、その撰者の不見識として非難されたが、今度のシンポジウムも「昭和、平成を通じて最高の作品が生まれる」と連衆も一般聴衆も期待したと言うのであれば、慣わし通り、「笛吹きと子猫と月と屋上に」としないで、「屋上に子猫と月と笛吹き」と、わざわざ第三らしからぬ、平句めいた句作りにした狙いと効果について説明して欲しかった。

要するに、第三の留めを問題にするのは、大切な第三をいかに丈高く、風格あるものにするかという為めである。はつきりした理由もなく、勝手な留め方を容認すれば、必ず、連句の芸術性の否定、もしくは破壊につながるであろう。こんな放埒を許しておけば、やがては発句に切字を入れないでもよい。花は桃でも梅でも椿でも何でもよいということになって行くだろう。私はそれが恐いので、敢て「鬼の舅」になり、苦言を申し上げる次第である。失礼と思われる発言があったかも知れないが、私の意のある所を酌んで、フランクな御返事をいただければ幸甚である。

「灰汁桶の」の巻鑑賞（Ⅲ）

東 明 雅

摩耶が高根に雲のかゝれる

ゆふめしにかますご喰へば風薫かき

水 兆

（現代語訳）夕飯にかますごを食っていると、摩耶山に夕立雲がかかって、気持のよい風が吹いて来る。

（付心・付味）起情の句。時節の付。時分付。前句の摩耶山に雲のかかったのを夏の夕飯の時分と見立て、夕立が来るのではないかと待ちながら、戸障子もあけ放した中で、薫風をめながら夕餉をしたためている様子を付けたのである。高い山にかかった夏雲に快い風、その気分は自ら通っている。

（転じ）前句の大きな景色から一転して庶民の生活、それも貧しい夕餉の風景に転じたのはよかったが、大打越の雪、前句の雲にこの付句の風と、天相の語が続きすぎた感がある。

（補説）かますごは関東で言ういかなご、こうなごである。和漢三才図会によれば、かますごは「凡そ春分の時撰州一谷に始めて多く之を取る。立夏播州明石浦、鹿瀬にて盛に之を取る。夏至の前後、讃州八島及下関にて之を取る。

一の谷より次第に西海に至る。其翌日更に之無も亦一異なり」とある。一方、風薫は現在の歳時記では三夏に入られ、よく、「風薫る五月」などと用いられて、むしろ初夏的な感じがするが、芭蕉時代の歳時記によれば、大よそ旧暦の六月、たとえば「俳無言」などには「扱、六月には風薫ると云也」とあって、現代の暦で言えば七月か、八月頃の風をさすことになる。そうなると、摩耶山麓の村々に風薫る六月には、その近海一谷ではかますごは取れない筈になる。このかますごは生のものか干したものか。時季的に言えば、これは干したものを食べているように思われるが、折口信夫氏は「かますごは関東のこうなご、いかなごの干さぬものである。口の中で生臭くて、新鮮のようで生ぐさい。田舎のちくわを食うと、臭い感じがするが、かますごを原料にするためだろうか。酢醬油で食う、げすのげすの魚だ。それだから俳諧的である。」（折口信夫全集ノート篇第十六巻）と言っている。折口信夫氏は大阪の生まれであるが、かますごの取れる時季については知らなかったのであろうか。これはおそらく、この句の作者凡兆も同じだっ

たのであろう。かますごもこうなごもいかなごも古い歳時記には記載されていない。だから、凡兆がかますごの季を無視しているのもあるいは当然かも知れない。現代の歳時記では晩春の季語である。

ゆふめしにかますご喰へば風薫^{かき}

蛭の口処をかきて気味よき

兆 蕉

(現代語訳) すがすがしい風が吹いてくる中、かますごで夕食をたべ終り、蛭にくわれて痒いところを搔いていると気持がよいものだ。

(付心・付味) 其人の付け。前句の夕飯を食う人を農夫と見て、昼は終日、田の草取りにせいをし、夕ぐれに帰って、くつろいでいる景を付けたものである。

「かきて気味よき」が、前句の「風薫る」爽涼の気分でひびき合っている。響きの付け。「芭蕉俳諧研究」の中で岡崎義恵氏はこの句に言及して、「此句を芭蕉の付味の典型的なものとしてみると、ひびきと呼ばれるものに近いやうに思はれる。感覚的な体験に伴ふ強い感情が中間の媒介を待たずして直ちに二句を聯絡する。前句から付句が生まれる過程も打てば響くというやうな所がある」と述べられ、カ行音を重ねた前句の語音の響まで付句がそのままに受けていると指摘しておられる。

㊦ マスゴ ㊧ エバ ㊨ ゼ ㊩ オル

㊪ チドヲ ㊫ テ ㊬ ミヨ

(転じ) この巻は三句の転じが鮮かで、発句と脇が庶民

的な気分、第三と四句目は富裕なゆったりした気分、五句目と六句目が優雅な気分、七句目、八句目は雄壮な気分、九句目とこの十句目はまた庶民的でありながら、さわやかな気分と、右の推移がきわめてはっきりと、また自然に行なわれている。

(補説) 蛭の口処は蛭に食われた跡。蛭は夕立、また水田などと付合語(類船集)、だから、当時の人は蛭と聞けばすぐ田植、又は田草取りを連想したのであろう。ことに前句に風薫る(季夏)があれば、当然、田植ではなく、暑い最中の田草取りの辛勞を思いおこすに違いない。そして、その辛勞から解放されて、蛭の食い跡を思う存分に搔くのが、いかに楽しく、気持がよいことが想像されたであろう。因みに口処には、クイド・クチド・クドコと三通りの訓みがあったらしい。このうちクドコと訓んだのは「附合考」だけである。クイドは食処という字をあてるのが本来であったらしいから、口処はやはりクチドと訓むのが正しいように思う。

蛭の口処をかきて気味よき

水 蕉

ものおもひけふは忘れて休む日に

(現代語訳) ままにならぬ恋の思いから解放されて、今日だけはゆっくり休み、思いのままに蛭の食処の痒いのを搔くことができ、気持がよいことである。

(付心・付味) 其人の付け。日ごろの悶々の情を忘れることのできた気分と、むず痒いところを思う存分搔くこと

のできた気分とがうつり合っている。

(転じ) 打越の「ゆふめじにかますご喰へば風薫も人情目の句、この「ものおもひけふは忘れて休む日に」も人情目の句で、転じがないようにも見えるが、一方は男性の生活そのままの描写であり、これは女性の恋の句とすぐ連続されるから、そこに自から転じが見られる。

(補説) この句の解釈には次の大体三通りの説がある。

① 百姓女が、たまの休み日に、つれない男の姿を見ず、しばらくは恋を忘れていた姿。

② 奉公している女性が、今日は暇をもらって里に帰り、平素の恋の悩みを忘れていた姿。

③ 勤めを休んだ宿場女郎が、凝った肩の血を蛭に吸わせて、平素の気苦労を忘れていた姿。

まず、この女性がなぜ蛭に食われたかについて、④水田や河川で蛭から食われたのか、⑤治療用の蛭に食わせたのかの二つから決めて行きたいと思う。さきにあげた「類船集」にも、蛭に対し腫物という付合語があり、蛭を治療のため使うことは、当時から行なわれていた。しかし、治療用に蛭を使ったからと言って、それをすぐさま宿場女郎、あるいは飯盛女の類と見るのは早計ではあるまいか。それはこの巻名残の表の恋句に、「旅の馳走に有明しをく」・「すさまじき女の智恵もはかなくて」として、宿場女郎、飯盛女の生態が描かれているが、歌仙一卷の中で宿場女郎の恋が二ヶ所に出てくることはまずないと見るべきであろう。

①の百姓女と見る説は、古くは「付合考」に「賤の女人目をしのぶ山里の恋はわりなき習ひにて、今日は農業に出ねば、つれない男の顔を見ず、しばしは恋を忘るるならむ」とあるが、これはもちろん、この女が水田の作業中に蛭に食われたと見てのことであろう。だが、そうなると、三句続きで山家の草深い環境が想定されることになるであろう。大方の註釈書は②の説である。この説にも、たまたま宿下りの女が農事を手伝って蛭に食われたあとを搔いているのだという考え方と、この女は瀉血用に蛭を用いたものとする説がある。はじめの説は①に極めて近く、やはり打越・前句の境地に近いように思う。

それで私は一応、この女性を奉公に出ている女が、何かの理由(多分、恋の悩みが絡んでいると思われる)で、宿下りして治療のため蛭に血を吸わせたものであろうと思う。ところで、「芭蕉句集」(日本古典文学大系)によれば、前句のはしたない人の気楽さに対して、宮仕えする人の気苦労を対照した迎付(向付)であるとしている。しかし、自の句の向付が成り立つには、その両句とも自とも他とも取れる句でないとな立しない。「蛭の口処をかきて気味よき」も「ものおもひけふは忘れて休む日に」も絶対に自としか考えられない句である。このようなものを向い合わせることは無理がある。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第四十五回 猫蓑会

第四十五回猫蓑会は四月二十五日(日)、江東区亀戸天神社事務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと二十韻十巻を首尾した。出席者五十二名

第一部 正式俳諧興行「藤祭り」一卷

第二部 二十韻十巻

(一) 役割

宗匠	副島	久美子
協宗匠	中田	あかり
執筆	内田	麻子
知司	上月	淳子
副知司	小林	千雪
同	原田	千町
座配	梅田	利子
座見	山崎	一恵
花司	市野沢	弘子
配硯	橘	文子
同	久保田	庸子
同	須田	智恵
老長	和田	和子

(二) 次第

一	席改め
二	席入り
三	配硯
四	献花
五	執筆登場
六	文台捌き
七	知司挨拶
八	俳諧興行
九	花前
十	玉串奉典
十一	花の句披露
十二	端作り
十三	吟声
十四	文台返し
十五	作品奉納
十六	知司挨拶
十七	退席

二十韻 藤祭り

捌・文 副島久美子

正式俳諧数々の御役

風はかなり強かったものの今年七回目の藤祭りは汗ばむ程の上天気の中無事終りました。

振り返れば亀戸の天神祭りはほとんど雨に降られたことがなく、余程猫藁会皆さん方の心掛けがよいのでしょう。それにしても年に二度行われるこの古式ゆかしい正式俳諧は、我等猫藁会のシンボルの行事となりすっかり定着の趣きです。

普段は早や日常的に生活の中に取り入れられている連句も、この行事を通して俳諧の連歌の成り立ちや芭蕉時代に今一度思いを馳せるよいよすがとなることと思います。

前回宗匠の御役好敏さんの御都合で急に私にと明雅先生からお電話を頂き又も腰を抜かささんばかりの驚き、思えば花司・香元・副知司・執筆・脇宗匠そして今回の宗匠とお役を頂く度に果して出来るのかしらと不安の暗雲が垂れこめ右往左往する私でしたが、明雅先生始め奥さま、秋元さま、式田さま方に励まされお導き頂いて何とか今日に到ることが出来たのだと感無量のものがあります。

今まで数々の御役を賜り、その都度世にも稀な貴重な体験をさせて頂きほんとうに有難く感謝の気持ちでいっぱいです。

夕暮迫る境内、棚の藤房は未だ思いの外短く、そう言えば今年はずれる程の花冷えが幾日も続いたせいかしらと、お連れの方達と話しながらゆっくと家路に向いました。

献盃の酒にほろ酔ひ藤祭り

鐘も霞みて渡る反橋

蚕卵紙未だ黄色くひそやかに

お茶の時間に甘辛の豆

鍵^ツっ子がひとり留守番三日の月

知らない電話切っとうそ寒

初猟のたかぶりのまま抱かれて

週刊文春またもスクープ

犠牲者の遂に出でたるポランテア

麦藁鮫のぼかり浮く海

松葉菊崖をびっしり埋めて咲き

ゲートボールに老いもさざめく

苛めたり苛められたり気がもめる

傷痕のこる右の耳たぶ

後朝の月淡々と雪の道

旧家の軒に燕越冬

給食も今は好みのバイキング

ハーレー連ねとばす高速

花前線追ひかけけふは津軽まで

山の窯場は陽炎の中

明雅 和子 弘子 千雪 千町 一恵 智恵 庸子 文子 利子 和彦 美保 和弥 良子 蓉子 久美子 執筆

藤祭り

東 明雅捌

藤の豊国

岩井啓子捌

広前も諸礼停止や藤祭り

逝く春惜しみ一句一直

揚雲雀雲の中より囀りて

新米教師任地遠くに

買ひおきのワンカップ酒ぐいと空け

外寝の恋を攻める藪っ蚊

夏の月淡く残れる後朝に

心も軽く吹ける口笛

江の島の観音様へ坂登る

万歩計つけよいよいの兄

円高は日毎夜毎に募りつつ

狼こはき三峯の邑

呼び返す穴戸梅軒鎖鎌

山賊髭に胸がわくわく

超ミニの女探偵シカゴまで

マリアのお告げ馬廉はおやめと

飛びこゆる溝の深きに月もなし

何はともあれ障子貼りかえ

秋場所は済んで若貴花相撲

鯛を干せる浜の賑ひ

藤の風豊国の江戸遊び来て

綾の蝶々よぎる反橋

春厨呼ばはる声の誰ならん

好みのカップ紅茶いっぷく

尾根越へてまた細くなり袖の道

口づけだけで終る短夜

無蓋車の男にやりと月白し

すぐになるかなドルの百円

奪衣婆は三途の川に坐りだこ

泥でこさへた団子並べて

ラグビーの延長試合酒すすみ

ゴロスケホーホ鼻の啼く

迷はずに教租が決めし縁に生き

長瓜のよな彼と彼女と

妊るは五人目の児で秋収

月の射し入る銀細工店

波の音静か静かに寄せ返す。

ロシアに住みて知りし人情

淡墨は我が想ふ花今盛り

毛を刈られたる羊軽々

啓子 好子 庸子 利子 武村

子敏 子敏

藤 祭 り

真 田 光 子 捌

俳 諧 の 奥

杉 内 徒 司 捌

藤祭り大正琴のよく揃ふ

二礼二拍の東風の階

焙りたるたたみ鯛をたたみゐるて

ジグソーパズル親子にぎやか

冬の月電柱の影ながながと

霜焼の手の恋知り初めし

先斗町うなじをはたくぼたん刷毛

道聞く外人何語なのやら

懸案の領土問題後まはし

あまりでかくて嘸めぬ飴玉

海坊主浴衣着てゐるやうなひと

チェリービールの泡がいつぱい

夢にまで求めし愛のステータス

芦火に燃ゆる胸乳ま白き

落城の姫のたどりし里の月

割りし胡桃の中はみ佛

半生をただ床柱拭いて来し

自転車で行くホームヘルパー

アルプスの山脈のぞく花の隙

春のしらみを写す画用紙

梅田

光 子

利 子

正 江

紀 子

利 子

江 子

代 子

同 子

利 子

紀 子

代 子

利 子

紀 子

江 子

利 子

紀 子

利 子

代 子

江 子

俳諧の奥究めたし藤祭

茂みにひそと卵抱く鳥

朗らかにぶらんこの子ら歌ひゐて

紙芝居とてどっと集まる

汗のシャツ手を借りて脱ぐ窓の月

尺取虫が卓上を這ふ

香港のげても喰ひを自慢せん

男に惜しき唇のいろ

好き嫌ひ進路変更まならず

第三夫人に茶の湯教へる

鱈起し越の海岸ざわめきて

氷柱のすだれポキポキと折り

跡継ぎが父の鬚剃る理髪店

はやくも「のぞみ」故障続出

月中天夜勤帰りのコップ酒

秋場所ビデオ繰り返し見る

ひよんの実を難なく鳴らすおぢいちゃま

煙管靴珍脊負子草鞋

地下出でし電車まばゆき花の駅

友と仰ぎぬ麗かな空

徒 司

美 保

冬 乃

千 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

乃 雪

保 雪

藤浪や

杉江杉亭捌

神の庭

副島久美子捌

藤浪や空に抜けたる青甕

亀鳴く池に朱の反橋

春炬燵逆引辞典繙きて

ファミコンゲーム熱中の子ら

夏の月工事の進むビル照らし

暗闇祭誘はれし幸

よろけ縞似合ひて母に似たるひと

犬の足跡続く砂浜

両替機賃の諭吉にしてやられ

息つめて待つ「ダア」か「ニエット」

ベーチカでウォッカ呻る赫ら顔

複合不況家計底冷

付文を何度出しても知らぬふり

ままよと許りおみくじを引き

梢越し無情の月を打ち眺め

夜寒をかこつ定年の父

正調の江差追分鮭番屋

話のつづきふるさとのこと

夢かとも上中下の花霞

校庭の隅揺るるふらここ

杉亭

達子

郁子

富美

良弥

郁弥

達郁

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

郁達

藤色に染まる池の面神の庭

亀のどやかに眠る石の上

世界地図春をルーペでたどるらん

ファミコンかちゃと鳴らす幼子

山荘の銃架に凍てし月射して

脱がしてあげる君の雪沓

ひとすぢに見つめる瞳底深く

漢字ど忘れ教育実習

円高ににんまりだんまり輸入商

籠のいんこが餌を争ふ

イトビートソーダー水がリズム打つ

梅雨雷に傘を又借り

襲名のおねり仲見世人の群

穴に入りて怨念の蛇

冷まじき恋の結末懲りもせず

月にひもとく西欧の秘画

再検診中性脂肪過多肥満

生前葬に酔ひしれる古稀

片丘の埴輪の馬へ花の散る

心地よき風渡る野遊び

久美子

哲

千

寿

美奈子

町

哲

奈

哲

奈

町

寿

哲

寿

同

町

奈

寿

町

寿

藤浪や

橘

文子捌

藤房の

中島啓世捌

藤浪や笙の音ゆるく神の苑

禰宜の袂を反す春風

折紙の蝶様々に作るらん

四角の皿にクラッカー盛る

山の端に上りし月にビール干す

少し汗ばむ肌が気になり

外泊を出張だよと言ひくるめ

商社は武器も豆も買ひ付け

留学の果はナポリの似顔絵師

潮騒の如聞こゆ舟唄

^{オキ}この頃は霜焼の子も見当らず

のっぺらぼうが狐火を提げ

壬生屯所総司にやりとうち笑みて

閨の乱れに拾ふ黒髪

色と欲ふたつながらを責める月

秋場所明けのゲーム三昧

^{オウ}小鳥来る故郷は今過疎のまま

夢を抱きて集ふ若き等

窯出しの壺並べ置く花の下

マイクロボスの残す陽炎

文子

清子

健悟

智恵

良子

清子

良子

悟

良子

恵

清子

同

悟

恵

悟

良子

良子

文子

清子

悟

藤房のゆらぐともなく宮の屋

つどひてのどか甲羅干す亀

道具市納屋の鋤鎌研ぎあげて

お茶受けに出す手焼せんべい

行水の盥にうつる宵の月

浴衣すべらす白き玉肌

知らぬままミスターレディに貢がされ

髭を切られたうちのみけ猫

隊長の訓示ながなが自衛隊

托鉢僧の前は素通り

^{オキ}寒芹の三寸ほどを野に摘みて

のっぺらぼうの振り向きし顔

夫の目を盗みてパリに逢ひにゆき

接吻すれば残り蚊の刺す

月登りそめて始まる夜相撲

力まかせに葛の蔓ひく

^{オウ}石切場いつも鈍音聞えきて

酔へばひとふし故里の唄

しがらみの花塞きとめし神田川

大原女のゆく町はうららか

啓世

路子

弘子

規美子

弘子

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

藤の彩いろ

中田あかり 捌

藤の花

若尾よしえ 捌

垂れ初めし房いとけなく藤の彩

反橋うつす春闌くる池

鳴き音よき飼鴛を賞づるらむ

甘党同志つまむ大福

恋を秘め美し月の巴里祭

シゴロ気取りのぶんと香水

UCのカード使へぬ店もあり

死ぬに死ねない墓地の高値よ

宇宙服着て旅行する夢を見て

バッハ聴かせて杜氏かもしぬ

そら打てよあっちに出たぞ土竜打

研修医者のこはい点滴

年増には弱味にぎられ有無もなく

眉きりきりとジェラシーの月

引揚者摘菜ばかり食膳に

そぞろ寒さに覗く「鬼太郎」

駅前まへの英語教室繁盛し

定年のひとにきびあるひと

花吹雪勝利投手にふりかかり

遠く近くに霞む山々

あかり

一恵

和子

シズ

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

子恵

撫牛の眼上げるや藤の花

屋台に並ぶせんべ炒豆

春炬燵電話鳴れども出でかねて

うなる児ひたに折れる折り紙

月涼し七里ヶ浜に影二つ

砂の足跡重ねときめく

ボランティア貯金用紙に押印す

生活保護費使ひ切るべし

旅に生き旅に死したる俳諧師

熱燗酌みて交はず旧交

初場所はつばしに念願叶ひ立行司

烏が増えし東京の森

シャンソンは黒いドレスに腕を組み

むかしや恋文いまはいきなり

墓塚の陰の口づけ月覗く

耳洗みみふ如洗みふ平草

居眠りの夜学まな子そつとそのままに

開いたままの本は「魔の山」

梢までも花・花・花の花万朶

鐘も霞める蝶の羽化時

よしえ

麻子

隆秀

美代子

志げ子

え

美

志

隆

麻

志

麻

志

隆

麻

美

麻

志

隆

美

四句目風執筆

内田麻子

思えば昨年の藤祭りの日に、この次の執筆を……。との先生の御言葉に、今の女子学生風には、エエッ・ウソー・ホント・シンジランナイと言う感じでしたが、冷静になって考えますと、私も何時か猫薺の古株となり、気楽な落第生では次の方々の迷惑にもなるし、その任でないことは自覚しながら「死んだ気になってやらせていただきます」と言う様なことを申し上げた記憶がございます。

さて、それからの一年は、何かひとつの責任を持った様で、省みますと又それを心にとずっと抱きしめて来た様な気がいたします。(あたかも恋句の様に)先輩方の助言、ビデオと先生の御指導をいただいで、昨年十月二十一日、第十二回俳諧芭蕉忌には、まことに緊張感そのものの中に何とかお役を務め、あそこは失敗したなど反省しながら一安心して居りましたが、季刊連句三九号後記に「執筆内田麻子さんの落ちついた文台捌に感心した」と明雅先生に書いていた

だいた事は、何よりも嬉しく思いがけないことでした。反面、先生もどんなにか心許なく、この御感想はまあ心配した程ではなかったと言う事なのだと思われたいました。

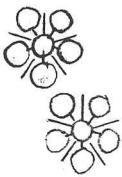
さて、今年の藤祭り、空も晴れて、いよいよこれで総仕上と言うところになりましたが、この半年間の間にも人生のさまざまがあり、喪中になられた好敏宗匠が遠慮されたり、知司の淳子さんの病後のお体を心配したり、私七代目執筆は、貫録がないので、和子老長の助言で、和彦、和弥、良弥の生きの良い男性新人達や私の長年の連衆、美保、蓉子兩人達に付句に出てください、又各御役の方々の美しい所作に助けられ、何とか又務めさせていただきました。しかし家で練習するのはせまいところで、いざ広い場所に出ると練習の甲斐もなくとまどったりして、後悔点となりました。心配だった吟声の方は、会場の音響がよくて、余り声を張り上げなくても、声が届いた様に思いました。

ああ終ったと言う気持は、養花天の如く半晴半陰なのですが、この一年はこれお役に緊張していた為か、友人達が次々流感に

熱を出したりされる時期も何とかぐり抜けて、(単にバカは風邪も引かないと言うことかも)先輩執筆の皆様はそれぞれに、発句、脇、第三の様な格調高い執筆役、私はならば四句目風執筆で行こうと思つたことも何とかなりましたかどうか、年齢的にも限界点のところ、お役を与えて下さった先生と援助していただいた先輩、今回同行の各位に心から感謝いたして居ります。

このお役をつとめて見て、正式俳諧にある格調の高さは、連句の起原のころの堂上連歌からの伝統の香りではないか、貴人、宗匠、脇宗匠、副宗匠の重鎮をいただいで、実質上の捌と進行を司る執筆こそ俳諧のプロでなくてはつとまらぬものと認識いたしました。

三百三十年の昔より咲きつづける亀戸天神の藤房のように、猫薺の連句も連衆が房の如く連なり、伝統の継承と共に、現代に於ける風雅の道を目ざして居ることに、天神の御加護あることと存じました。



藤祭正式俳諧私記

中田 あかり

今年の藤は去年より遅れている。房も短
いし、房先の蕾は雛あられの半分程であっ
た。ゆっくり花が楽しめるだろう。

風が強いのので、藤房の遊ぶ様子が眺めら
れ、何よりも飛びきりの天気である。

猫藪会員五十名その他が集まり、亀戸天
神で恒例の正式俳諧が興行された。

平成五年四月二十五日。本日、私は協宗
匠のお役をお受けした。

それぞれ役についた会員は、場に馴れ
た落付いた雰囲気である。

配役の何と初々しいあいらしい方。献花
は真赤な芍薬の玉であった。宗匠の「執筆
・執筆」の声に、もう一つ忘れられない声
の重なるのを感じた。

私、あかりは真面目に協宗匠の役目を果
している。その上でタイム・スリップをし
たのである。

柔らかな、良く透る明雅先生の御声は、
この同じ場面で宗匠として「執筆・執筆」
と呼ばれた。その時、会場に私達に安心感

を与えながら、びりりとしたものが流れる
のを知ったのは、私だけだったろうか。

あれからもう何年か経った。私は人の運
命の限らない変化と面白さを味わった。

歴代の執筆は各々の持味があって立派だ
った。私が凄いなと思ったのは某氏の文台
捌。例えば筆を調べる。そして使わぬと決
めた筆を置く指が、離れる瞬間まで演じて
いる。

さすがに堪能な趣味をもつ某氏。若し指
摘すれば「そんなことありません」と否定
されるだろうが、かりにそれが無意識下の
意識だったとしたら益々感動。じっと拝見
して涙ぐみそうになったことがある。

終わったあとと続くのだと。

亀戸天神は私にとってなつかしい社だ。

正月の初天神と、藤の盛りに必ず訪れた。

総武線の始発駅は両国で、両国と秋葉原が
つながったのは私が小学生になる年だった。
だから天神様には両国駅迄タクシーでゆく。

自動ドアが無かったから、車には粋なつ
ば付帽子をかぶった助手が乗っていて扉を
あける。亀戸駅で降りると関八州の香具師
が集っていた。

大きな父の掌をつかみ人混みを抜ける。

亀戸天神の太鼓橋には当時階段が無かった。
先ず父が橋の中央で腕をひろげて待つ。小

さな皮靴が力いっぱい駆けのぼり胸にとび
こむ。二回も三回も繰り返した。藤の香り
にむせぶように汗ばみつつ。年端もゆかぬ

子に学業成就のお守りを買った父の想い出
が充滿している神社。

水色の袴の運びも見事に、神主が玉串を
折敷に奉じて進む。宗匠が天満宮に供え、
正式俳諧は終盤に入った。

別室で二十韻興行。十巻が巻かれる盛況
に明雅先生の御人徳を感じた。今日を詠む
発句が続々と生れ、笑い声がひそやかに起
る。連句の醍醐味を満喫しながら巻き進ん
だ。

「あかりさん」連衆に呼ばれて立ち止る。

反橋の袂に白梅が一輪反り咲き。閉りの枝
には青梅が互いを見較べるようになってい
た。橋詰の梅鉢紋の街灯がともった。八重

桜は満開。右手奥の白藤の長い房が池面に
揺れる。夕暮の気配を帯びた雲は刻々と色
を深め、風にちぎれてゆく雲も。振り向く
と社拝殿は閉じられた。春と夏のはさまに
立ち、私は猫藪の仲間たちと悴せの実体の
中に心をさらしていた。

馬追

付勝練習二十韻

東明雅

切締句投
7月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中

撫子残る月代の道

秋深し篆書一幅書上げて

付

治定 ゴルフのクラブ磨く縁先

佳作 1 鋸の目立に要らぬ口出し

同 2 煙草取り出し探す灰皿

同 3 ジクソーパズル孫が散らかす

同 4 役にもたぬ石を集める

同 5 友の訪れファックスで受け

同 6 学芸員は眼鏡ふきをり

同 7 日本酒に替へシャトーブリアン

同 8 口にこるばす甘きお煎茶

同 9 アペリティブにワイン楽しむ

同 10 喉ごしのよき玉露出さるる

同 11 この頃くせになりし珈琲

同 12 茶の湯の席に友と出くはす

同 13 シュガーたっぷり入れたコーヒー

同 14 エスプレッソのコーヒーを淹れ

同 15 パイの膨らみのぞくオーブン

秋桜子

達子

よしえ

遊

鋭太郎

千雪

良子

文子

健悟

紀子

和弥

よしえ

代々子

妙子

美子

ひとし

啓子

千雪

同

同

※あろう。教養高く裕福な人のイメージで付いている。悠悠々自適の境涯が余情として浮かび上がってくる。それにくられて、1は句としては治定の句よりおもしろく、生き生きとしているが、前句の位には合わないだろう。2も悪くない。軽みという点から言えば治定の句よりもっと軽いであろうが、付味から言えば一步劣るだろう。3以下、18までは一応前句に付いていると判定した。佳作としたわけである。ただ、その順番は不同で、番号がすくないのが勝れているわけでは決していない。4・5・6も、もし、これ以上の作品がなければ治定されたかも知れない。その点では以下18まで同等である。さて、7から16までは、すべて飲物・食物で、お酒・お茶・珈琲などであるが、これは遁句としては最も普遍的で、かつ効果的なものである。それだけに、二十二句の応募作品のうち、約半分が飲物・食物で占められたのは驚いた。かつて、猫衰会では、「四句目の猫」という諺が生まれたほど、猫を四句目の遁句に使うことが流行ったことがある。流石に今回は猫は一句も姿を現わさなかったのは、皆がマンネリに飽いたためであろう。お茶・珈琲などの句の中には、表現も気が利いていて、すばらしいと思つたのも幾つか混っていたが、このように多いと、どれを取ってよいかに迷い、結局全部落ちてしまった。今後は「四句目の珈琲」はよほどの場合でなければ出せないことになるだろう。17・18は同じくその人の付けであるが、会釈の付けになっている。17は先にのべた前句の位と合うかどうか、18はおそらく女性を描いているのであろう。こ

同 16味にうるさい荒びき珈琲

文子

同 17藍の薄れしたつつけの膝

同

同 18メトロカードを帯の間に

和弥

同 19西洋館に主尋ねる

同 20市のさやぎを浴びに出て行く

同 21温度ほどよき午後後の浴槽

四句目は、「四句目ぶり」とて、也、けりなどのかるき留りにて、ふしなきをこのむ也。古事、本説などきらふ也」(俳諧無言抄)と昔から言われている。芭蕉の作品には、たとえば「冬の日」の中に、「鶉ふけれと車引きけり」(初雪の巻)、「鶴見る窓の月かすかなり」(炭売りの巻)など多く見られるが、現代の作品には殆んど見られない。切字を平句に用いてはいけないだろうという遠慮からではなからうか。也(なり)・けりを、一句の途中で使って二章体とすることは平句の場合はずい、一句の最後に也(なり)・けりなどを置くのは、かえて一句を軽くする効果があるようである。

今回応募の作品を見ると、四句目を軽くということはいささんよく承知しておられるようである。治定の句、クラブと言えはゴルフに決まっているという人もあるだろうが、ただ「クラブを磨く」よりも、やはり「ゴルフのクラブ磨く」という方が通りがよいだろう。あるいは篆書は中国的・東洋的のものであるのに、ゴルフでは西洋的で付味が悪いのではないかという人もあるだろうが、篆書などを嗜む人の位を考えると、やはりゴルフ位でなければ合わぬで※

の句を取れば、ウラの展開はおもしろくなつたかも知れない。19で西洋館を出したのは、前句の篆字と微妙に付味がよくおもしろいと思つたが、尋ねるとなるとまた外に出る景ともなりかねない。20はいよいよ外の景であり、完全に打越の景にかえるのではあるまいか。21篆書を書き終えて、ゆつたりと湯にひたるのは、結構であるし、おもしろいけれども、この句をそのまま受け取れば場の句になりはしないか。ほどよきだから自の句と取れないことはないけれど、何か表現の工夫がありそうだ。それに午後というのが、打越の月にさわり、時分の打越である。夜分・時分の打越は忘れがちであるが、カードの式目歌には、「同じ文字・神祇・釈教・恋・無常・夜分・時分三句去べし」と銘記してあるから、その通り守るべきであろう。

さて、次は五句目、二十韻ではウラの折立になる。ウラに入つたから、オモテで禁じられていた、神祇・釈教・恋・無常・地名・人名・病態・妖怪の類も出してよろしいという事になっている。「待兼の恋」と言つて、折立に恋の句を出すのを一応嫌うけれども、これも前句次第で、前句に恋の呼び出しがあったら、進んで恋句とすべきである。また、二十韻ではウラの折立は月の定座になっているが、この巻では既に脇で月の句が出ているから、この五句目は雑。また打越、前句が人情自の句であるから、今度は自の句は避け、他の句、自他半、場の句のうちから選んで付けるべきであろう。大勢の方が付句に応募されるよう希望する。

16	副都心真向ひにして花冷ゆる 翁堂閉ざされしまま花ぐもり	元子
17	花曇りお喋りつづく乳母車	達子
18	釜の湯のたぎるしじまや花の冷え	美津
19	花冷えにとまどふ小鳥ビルの街	智恵
20	あやにやしをとこをみなも花の冷え	政志
21	花冷えやビルよりビルへ架かる橋	央子
22	花冷えの講座はじめに急ぎけり	良子
23	花冷えや家族の囲む車椅子	淳子
24	花冷えや緑茶賜る長命寺	路子
25	花ぐもり外人墓地に屋台かな	安子
26	花冷えの礎の上に寝転びぬ	淑代
27	花の冷え双手を挙げし乙女像	和代
28	旅よりの花冷えつづく集ふ日も	麻子
29	花冷ゆるまではふくらむ心かな	守英
30	花曇り座につどふ人親し	富美
31	花冷えや玻璃きらめける街を行く	健悟
32	花曇りに飛び立つ大鴉	一恵
33	花冷えや「オー・カルカタ」上陸す	好敏
34	おほいなる保存樹の花冷えびえと	恵美子
35	鳴り出でしカラクリ時計花の冷え	よしえ
36	花曇り白紙のノート前にして	和弥
37	花曇ガラスを拭いて句座開く	狷之介
38	バス停の椅子のかたさや花の冷え	
39		
40		

の話がありこれを発句に詠まれたのです。挨拶と即興、それに滑稽もあつて、なんとまあという花冷えです。

22 花冷やビルよりビルへ架かる橋

西新宿住友ビルの前の通りから京王プラザへ通じる歩道橋が架かっている。高層ビルとビルを結ぶ大きな景に、一層花冷は拡がってゆくのです。

33 花冷えや玻璃きらめける街を行く

高層ビル一面の玻璃がいろいろな角度できらめいている花冷えの街、作者はその思わぬ冷えを心のはずみにして、初講座へ急いでいるのでしょうか。

37 鳴り出でしカラクリ時計花の冷え

丁度時間になって扉が開きカラクリ時計が鳴り出したのです。それ迄も花冷の陽気だったのですが、カラクリ時計の音によって、その瞬間一段と花冷えが身に迫ったのです。

以上、花冷え、花ぐもりの季語と切字が一句の中に凜として気品や風格を与えています。

切字を代表するものは普通「や・かな・けり」です。しかし、これはどこ迄も表面に現われた切字ですべての言葉が切字となる事ができるのです。芭蕉も『去來抄』の中で「作者が精神こめて切字として用いる時は四十八字皆切字である」と言っています。

連句の成立ち

式田和子

連句とは、甲の人が一句読み、乙の人がそれに付けていくという、二人以上の唱和の製作形式の文学です。これは連歌の方法に倣ったものですから、連句(俳諧)の起源は連歌の起源でもあります。

◎起源

●あやにやしえをとこを 伊邪那美(古事記神代の巻)

あやにやしえをとめを 伊邪那岐

単に言いかけだけのことで、起源と言うほどのこともないと思われませんが、掛け合い歌であり、言霊信仰ということが考えられます。

●新治つくばを過ぎて幾夜か寝つる 日本武尊

かがなべて夜は九夜日には十日を 御火焼の老人二条

良基(一一三二〇―一三三八)がこの歌詞をとって、菟玖波集や筑波問答の題名としています。良基は撰政閑白でもあり、連歌の式目を制定したこの道の権威ですから、これが連歌の源と考えていいでしょう。

●佐保川の水を塞ぎあげて植ゑし田を(尼) (万葉集八)

刈る早飯はひとりなるべし(大伴家持)

新治の歌が、筑波山の唄歌とすれば、これで短連歌の形が決まったといえましょう。これだけではつまらないので、次々とつけていくようになり、これを鎖連歌とい

ます。

◎十二世紀

奈良の都を思ひこそやれ (公教)

八重桜秋の紅葉やいかならん(有仁)

しぐるるたびに色や重なる(越後のめのと)

鎖連歌には、何句という決まりはありませんでした。

◎十三世紀 十四世紀

この頃より連歌が後鳥羽院の宮廷における歌会で定家などが盛んに行ないました。付け方は、有心で優美につけられ、これを柿の本の連歌といいました。地下の人の作るのは狂句というわけで、栗の本衆といわれました。歌の中心、冷泉家、二条家などで勝手な式目で興行されていたので、統一を望む声が出て、二条良基が『応安新式』という百韻の式目を完成させたのです。(一一三九二)

◎十五世紀

応仁(一四六七)の頃、有名な連歌師宗祇ができました。

『新撰菟玖波集』が準勅撰集となりました。

宗祇―宗長―宗牧―宗養と続き、連歌の最盛期でした。

紹巴が最後の連歌師です。

●俳諧とは滑稽のことです。前出の栗の本がその源です。竹馬狂吟集(一四九九)は、俳諧連歌を集めたもので

す。

◎十六世紀

山崎宗鑑が『俳諧連哥抄』一名『犬筑波集』を出した。これはいまままで言い捨ての句ばかりだったのをまとめたものです。荒木田守武(一四七三—一五四七)言い捨ての句ばかりではつまらないので、飛梅千句というのを作った。

◎徳川時代

貞門、談林風の俳諧が流行した。芭蕉の俳諧は芸術としてたかめられたが、庶民の間には前句付などが流行し、元禄の頃にはこれが一種の企業となり、お金をとる点者が出てきて、貞門、談林の人たち、其角などは皆、点者となりました。句を集める所を会所といい、ここを通して、集め出版されました。冠付けなどを合わせて雑俳というようになり、連句はあまり都会では流行らなかつたのです。しかし、地方では、盛んに行なわれて、美濃派、伊勢派といいましたので、田舎蕉門などといわれました。伝統は北陸から全国に広がり、蕉翁―北枝―希因―蘭更―蒼虬―白雄―芹舎―凌冬―芦丈―明雅と続き現在に至っています。美濃派は獅子吼です。

◎現代

正岡子規が、連句は非文学なり、と言ったので、連句は衰退していましたが、昭和四十五年に復活。もう一度日本の文学を見直し、付け合いによる人間性の有る文学が評価されたのでしょう。近年はたいそう盛んになりました。

付勝二十韻「飛行船」 秋元正江 捌

飛行船ゆらりと過ぎて春ぞ行く

砂場に子らと遊ぶのどらか

若鮎にをどり串打ち焼くならん

村の駐在さんは留守勝

長風呂を妻にしたられ冬の月

近松の忌の鏡台の紅

気が付けばローン一億火のくるま

立喰そばの汁のからさよ

予備校のまたもふえたる駅の前

遠きアルプス壁のくつきり

短夜に現像いそぐ写真技師

搔くにかかれぬ水虫の足

無理やりに馴れぬ正座を強いられぬ

三三九度の果てしやや寒

月まろくペビー連れきしこふのと

大地豊かに葡萄みものらせ

がつしりとしわ深き手の巻煙草

人生半分探しものして

先づ犬が花のトンネル駆け抜ける

どよめき囁すどんたくの波

平成四年五月九日 首

同 五年三月二十七日 尾

清子 啓子 麻子 徒司 豊美 千町 光子 元子 達子 好敏 一恵 杉亭 弘子 文子 雅代 利子 美津 庸子 澄子

連句教室

歌仙三卷

平成五年四月四日
於 江東芭蕉記念館

花曇り 東明雅捌

大川渺々 杉内徒司捌

花しぐれ 秋元正江捌

やはらかな翁の文字や花曇り

明雅

大川の渺々として風光る

隆秀

ほろ酔ひの猫に蓑貸せ花しぐれ

水壺

池の面揺らす風の暖か

千恵子

岸のほとりに揺るる芽柳

郁子

町騒はるか笑ふ遠山

あかり

バーレスク窓より蝶の迷ひ来て

淑代

卒業子祝の膳の賑やかに

和子

春炬燵選抜野球眺めぬて

良弥

宅配ピザを切り分ける皿

千町

サインポールを贈る手から手

孝子

絵てがみ一通送るファックス

路子

歓迎宴果つるともなき月の夜

文人

鉄塔にかかる満月見てゐたり

央子

望月にジャンボジェット機着陸す

蓼艸

出湯の里も秋半ばなる

千雪

稲架のたわみて遠き笛の音

雅辺

幼なの足にのぼるうそ寒

正秋

小面の舞つかまつる放生会

K

さはあれど紅葉狩りにはちと早く

海砂

ゆく秋の音楽会の隅っこに

正江

鬼火の中の青きマスカラ

恵

維茂卿はよき男なり

和

「落穂拾ひ」のミレー複製

萩原 久美子

膝枕たをやかな息聞こえけり

清子

趣味合へど背丈収入気に入らず

孝

天領の地のマヌカンの更衣

艸

家事一切を夫にまかせる

同

捨てる神様拾ふ神様

砂

覗き見などはいとはしたなし

壺

知能線感情線もあかぎれに

雪

政変のロシアの涯に兵眠る

孝

熟睡して百年前の耳もらふ

美

月の鼻もらすつばやき

町

餅霜焼もいまはなつかし

秀

川さらさらと岸の石塊

り

父と子がエッシャーの絵の謎を解く

代

峡の月猪豚鍋を囲みつつ

郁

風邪気味に蜂蜜レモン鎌の月

秋

半熟卵汚す口もと

人

左利きにて算盤の技

黍穂

行きては戻る双六の京

艸

金塊は風林火山の蔵の中

K

意のままに石油市場の乱高下

砂

天狗舞舞ひて院宣下さるる

壺

敬遠策で満塁にする

人

青き海原鷗飛び交ふ

孝

かしまりつつ啓蟄の虫

艸

一陣の桜吹雪を総身に

町

花全線やうやく延びて五稜郭

和

蒲公英の匂ひありやとつまみたる

弥

夢二描きし臙なる女

恵

春のショールを深々と巻く

和

風船壳に刻の過ぎゆく

路

春の衣こぼれて牛車ゆるゆると

猫が不倫の手引きするなり

留学の行方の知れぬプロフェッサー

ビールばかりで肥るウエスト

己が妻ふと忘れたるうすら呆け

とげぬき地蔵にぞろぞろと婆

都庁舎は一千尺の雲の上

世界地図から宇宙地図へと

辞世の句「おらへ・だぬと」と言ひさして

うたかたのあと消しゴムで消し

男体にもたれて女体月の翳

耀ひの里の露寒の肌

フォービートエイトビートに虫を聞く

ぼりぼりと食ふ干した小魚

自転車の前と後に双子乗せ

大道芸も組合化する

場所取りの新入社員花万朵

隅田の彼方初虹の立つ

ナオ 送り来し骨の透けたる蒸鯿

頭と尻で書ける筆べん

明け暮れにまだいとけなき般若経

見えかくれする母の面影

徹けぶる宿に籠もりて鈍磨く

よく味へば甘き梅干

のびのびと四肢ながながとペアルック

ひと目かまはぬキスに死刑を

逢ひに行く藤のステッキ一葉忌

角の八百屋の下ろす鎧戸

酒こぼす月の屋台の偽刑事

予言不思議に当たるうそ寒

ナウ ぶつつけの長を押しつけられて秋

篆刻による印を誂へ

はじめての読書は「巖窟王」なりし

国語教師となりて七年

新旧のトンネル通す飛花の山

あの雲越えん蝶々の夢

ナオ 遍路笠嘆きの質はさまざまに

岬めぐりのパスは満員

ラムサール登録さるる谷津の渦

襲ふ溽暑をしのぐ名曲

ところてん塗り箸使ひすすりゐて

伏し目勝ちにて道ならぬ恋

くねるものすべてくねらせまだ駄目か

「箱男」ゐて槌おとをきく

枯芝を踏みて出棺したりけり

覚めてあわ食ふ邯鄲の夢

月渡るプラネタリウムの外あかし

新絹のつや撫でる母と子

ナウ 気が付けば老いと呼はるる冬近し

自然体にて後の先を取る

公園で技悠々と太極拳

燃えないゴミに燃えるゴミ載せ

花びらの里帰りせし柿右衛門

揺るる海市を給へ枕神

★新刊紹介★

猫 蓑 作 品 集 Ⅲ 千八百円

今年も早々に猫蓑作品集Ⅲを刊行でき、うれしく思っております。御協力の会員諸氏、ことに編集・校正の方々ありがとうございました。

「季刊連句」に左の方々より、御芳志をいただきました。有難くお礼申し上げます。
 一金 三万円 坂 本 孝 子 様
 一金 一万円 加 藤 K 様
 一金 五万円 猫 蓑 会 様

芦丈翁俳諧聞書(Ⅷ)

(承前)「わがいはは鷺にやどかすあたりにて」という、一寸離れ家の森の際か何かの庵におつて、それから夜、森に鷺が来て泊る場所だと、Hそうでなけりやおもしろくありませんね。Nそすとね、それから見たことになるだ。日がちりちりしているに、まだ稲を刈っているなと、それからその次にね、「髪はやす間をしのぶ身のほど」Hそすと、これはすぐ恋の句になるわけですか。Nこれは恋だ、それで、あの気楽に髪の毛の伸びるまで遊んでお出なさいと、忍んでおいでなさいと、こうすると、その稲をかる人と、鷺に宿かすという人も、皆人がちがうだ。Hなるほど、Nそれからして、その次に行つて、「いつはりのつらしと乳をしぼりすて」、これはその髪をばやすんだ。何を偽りしたか、偽りの結果が乳をしぼりすてる、子供を産んだけれど、子供はどうしたか、もう手元にはおらなくて、乳をしぼりすてる、その句は自じやねえ、それは他だ。それからして「きえぬそとばにすごすごとなく」と、そうするとその泣く人は

乳をしぼりすてる人だ。それも自じという人がいたが、そんなもの自じやねえだ。「すごすごとなく」なんて、自分が自分をそんなにいいようがねえじやねえか。他にきまつているだ。Hなるほど、Nけど、その髪はやす人と乳をしぼる人は同じ人だ。Hそれをよそから見ているわけですね。Nそれからその次いつてね。「きえぬそとばにすごすごとなく」というもんだで、亭主が死んだか、子供が死んだかして、まざまざと新しい卒都婆が立ててあると、Hその次は「影坊のあかつきさむく火を焼て」ですね。Nそすると、これは何だだ、偽りのつらしという人じやなしに、影法のあかつきさむく火を焼て、これは誰でもいいだ。Hハハア、Nそこいつて、「あるじはひんにたえし虚家」と、そすると、その主人が火をたいていることになるだ。こういうところの運びをよく分かることが大切ですよ。その分らないものがアレコレ理屈でやつて行つてもね、芭蕉の連句は理屈じやねえからして、Hこの歌仙は出勝ではなくて、芭蕉につけて行つたものでしょうね。ま、芭蕉が削いたのでしょうけれど、Nそれはまあ、それだけの人がよりあつてやつたわけ

だ。それで学者はこんな事をいふです。佐々雪吾なんて人が、まあ、芭蕉をえれえ研究した人で、わし見ないけれど、何か俳諧講座で述べていたというのを聞いたことがあるが、連句というものは、お風呂の中で大勢がやがやいろいろ喋るようなもので、順々に、ヤ実はこんな事があつた、どんな事があつたと、言っている。なるだけ大勢の方がとつびな珍しい話も交じってくるからして、おもしろいのだ。連句というものはそういうものだ、いや、とんでもねえことをそれでも言ったもんだと、Hウーン、それはちょっと肯けませんね。Nそんな乱暴な、そんな下等な物じやねえだ。H「そらそうでしょう。連句もずつとたどつて行けば、連歌から来たいろいろの法式を守つてやつて行つていこうし、お風呂の雑談など失敬千万ですね。それは飛んでもない話ですが、連歌から連句になつてさらに発展したものもあるですよ、たとえば、今おっしゃつた自他の別などは、連歌の時代には見られなかつた、新しい方法でしようね。Nそういうことばかじやねえ。付肌というものがね、全然違ふだ。それで、支考がこんな事言つたけど、支考のいう事

を皆馬廉にするけど、支考の言うことも初
のうちはとても真面目だね。H ええ、芭蕉
は支考を非常に讃めていますよ。N それは
そのわけだ。去来やなどは、芭蕉がぐんぐ
ん進んで行くのにあとについて行ききれな
いで、猿蓑の撰をやったで、もうこの辺で
止まってくればいいと、それに芭蕉はそ
うじゃない。どこまでも無窮動で行ってし
まう。そでで、「八九間空で雨ふる柳かな」
という句の意味が分らなんだ。ところが支
考はそんな時分が二十代で、今入って来た
ばかりでしょう。前の方のことは知らねえ
からして、今の芭蕉の言うことがよくのみ
こめるだ。一番新しいことの分かるのは支
考だと、だから支考がかわいくてならねえ
だ。だで、死んだ時、あの遺物や何だって
支考が大変くれるけどね、H 「いやあの手
紙でもね、支考は百人に一人の傑物である
というようなことを書いておられますね。N
「それで、その支考の言ったことに、「句
に新古なし、付けに新古あり」と、あれは
何だだ、今言ったね、八九間空での巻にあ
る、「初荷とる馬子もこのみの羽織きて」
「庭とりちらす晩のふるまひ」というとこ
ろ、それを直してね、「内はどさつく晩の

ふるまひ」としてあるが、初荷とる馬子と
いうのにもって行って庭とりちらすじや、
荷をつけたりおろしたりして庭とりちらす
と、それは古風ですだ。その付けは根が切
れていないだ。荷物をつけたりおろしたり
して庭とりちらすと、それを「内はどさつ
く晩のふるまひ」と根を切っちゃってるだ。
突き放してある。H 「俳諧の貞門時代の物
は、談林時代の心付、それから蕉風になっ
ての匂い付、何ですか、まあ、そういう付
け方が芭蕉の連句の芸術性を高めたもので
すね。N それも宗房と言った時にね、貞徳
翁の十三回忌追善の百韻を寛文五年十一
月十三日、これはね蟬吟公の立句で、「野は
雪にかるれどかれぬ紫苑哉」と、「鷹の餌
ごひと音をはなき跡」、それにその次に、
「飼狗のごとく手馴し年を経て」、鷹とい
うから飼狗と付けるだね、H 鷹と犬、物付
ですな、N それからして、四句目が「兀た
はりこも捨ぬわらはべ」と犬というから張
子を付けた。H ハハハ犬張子。N その次へ
もって行って「けふあるともてはやしけり
雑迄」雑を張子人形ととりなして付けただ
ね。それからして芭蕉が付けてがね、「月
のくれまで汲むもゝの酒」と、ウン「長閑

なる仙の遊にしくはあらじ」と、まあ桃だ
からね、仙というような文字をもつてくる
と、「景よき方にのぶる絵むしろ」と、あ
そぶというから絵むしろと、それから「道
すぢを登りて峰にさか迎」H アア、坂迎え
ですな。N それから、こんどは「案内しり
つゝ責る山城」と、峯にむかふちゅうとこ
ろで、それから今度は山城を攻めると、「あ
れこそは鬼の窟と目を付て」と、次は「我
大君の国とよむ哥」H ハハ、謡曲大江山の
文句取りですな、N これ、百韻を全部読ん
で行ってごらん、これが芭蕉のいうその
古という。H ウン物付の時代、N 古風のね、
H そうですな。N これがその、そういう付
はすべて古であると、H 寛文五年ですから
無理ありませんね。貞門のママ最後の時
代ですな。N それでね、芭蕉の連句につい
て、わしがね一文を草したことがあるけど
も、「芭蕉の連句は万葉の誠を魂となし、
宗祇の白河百韻の付味より三句の転じを工
夫したるもの、尊き哉五歌仙」というね、
そういう文を作ったけれども、まあ、芭蕉
の連句をワシ付度するとね、「誠の外に俳
諧なし」それからして「造化にしたがひて
四時を友とす……」

(以下、次号)

二十韻三卷 平成五年四月九日
於 鎌倉公民館

花満つる

田村満子 捌

さゆらぎもなく花満つる段かづら

上着片手に春惜しむひと

一絃の琴に向ひてのどらかに

苦みの効いた板チョコを食べ

モスクよりコラン流す夏の月

ひざまづく婢の跣足愛らし

目を盗み身八ツ口より手を入れて

麻葉隠して犬に吠えらる

政治屋と云はれしドンも物忘れ

うっすら雪のかかる山々

寒泳を終えし子に盛る汁粉碗

粗朶折りくべる爺のやさしき

人柱壺封じしか道祖神

地球温暖龍田姫泣く

月の暈婚のヴェールは夢の中

お色直しは小紫いろ

盃あげて昔を偲び唱ふ歌

鯉悠々と巡る庭池

ゆっさりと尺藤揺れて地を払ひ

大掃除済みお茶を飲むらん

桃 徒々子

信 子

子 満

信 子

桃 信

信 子

桃 信

桃 信

代 満

代 満

代 満

桃 代

代 桃

信 代

同 代

満 同

信 同

桃 同

満 同

代 同

囀り

岩垂景翠 捌

囀りの鳥語それぞれ楽しかり

若緑せし庭の片隅

八朔ののがみ残れるジャムを煮て

デコレーターの飾るウインド

月さして迷路のやうな港町

故国思へばそぞろ身に入む

火の恋しあなたも恋し酒恋し

幼なじみを嫁に貰ひて

産土の森に見つけし落し文

御進講には英語要らない

クリントン口すべらせて大わらは

鞭ふりかざし草原の馬

倒錯の写真ひそかにかくしもち

離婚届をつきつける妻

オホーツクの水塊月に燦きて

鱈のぶつ切りどんがらの汁

一病を薬に待み自史綴る

旅の鞆に夢を詰めこみ

ファインダー何処を撮っても花の山

ジャンケンボンの野遊びの子等

景 翠

文 子

子 子

道 子

道 子

文 子

文 子

道 子

道 子

翠 子

文 子

文 子

道 子

道 子

文 子

文 子

道 子

道 子

翠 子

道 子

花浮かれ

本田八重子 捌

今しばし大和島根の花浮かれ

酢茎もやっとな馴れてよき味

ランドセル新人生の重たげに

角の店屋に眠るむく犬

菖蒲湯の窓にまあるき月眺め

浴衣はだけし肌の白さよ

コレクトで恋をささやく長電話

いつ百円になるか円高

再びの世界一周思ひ立ち

家に居着かぬ爺と婆様

秋刀魚船吃水ふかく帰り来ぬ

忘れ扇の香り失せたる

月美しく君の空闊埋めばや

ダブルお願ひシングルは嫌

カウンターの走るバーボン受け止めて

寒取土俵熱気あふるる

住職は医者も兼ねたり手間いらす

奇抜設計迷ふ階段

満開の楊貴妃桜枝たわわ

初鶯の遠き山の辺

志げ子

好敏

多恵子

八重子

多

志

多

好

多

志

好

多

好

志

同

八

志

好

八

多

連句会案内

●連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 江東芭蕉記念館
江東区常盤一―六―三

●柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マレット下車)
(電)〇四七―一七五―三七四六

●A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜
午前十時～十二時
会場 新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
(電)三三三四―一九四一(代表)

●猫藁会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館
江東区常盤一―六―三
(電)三六三一―一四四八

雁帛往来

▽三月二日・三日 熱海MOA美術館を見て、翌日伊豆大島に樺を見に行く。
▽三月七日 深川芭蕉記念館で連句教室。出席十六名。

▽三月十三日 A・C・C歌仙実作。
▽三月十九日～二十四日 マレーシア旅行
▽三月二十七日 A・C・C実作、平成四年度の講義これで終る。本日、倉本路子・橋文字・岩井啓子、三氏に伝道書授与。

▽三月二十八日 柏連句会、十四名出席。
▽四月二日群馬県上野村やまびこ荘に泊り、翌日、お雑粥の行事を見る。

▽四月四日 深川芭蕉記念館の連句教室、二十四人参加、三卓にて歌仙興行。
▽四月七日 西国の「江戸東京博物館」を見に行く。

▽四月十日 A・C・C新学期始まる。今期より講師に式田和子氏加わり、お陰で大変楽になり助かる。午後鶴の会出席。

▽四月十一日 柏連句会 二十名出席
卓で興行。同日、角川書店、俳文学大辞典の原稿校閲して返送。

▽四月十二日～十四日 京都の花見。
▽四月十五日 電通連句部、七名出席。
▽四月十八日 静岡の関森勝夫氏を訪い、もくせい会館で二十韻二巻興行。

▽四月二十四日 A・C・C
▽四月二十五日 亀戸天神藤祭り正式俳諧興行に参加。すべて順調に正一時間で首尾、あと二十韻興行、出席者五十二名、

▽四月二十六日 季刊連句四十一号の原稿をまとめる。

季刊「連句」第四十一号
平成五年六月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所
▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方
電話 〇四七(七五)一一九二
振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷
▽277 千葉県柏市酒井根六二六一
電話 〇四七(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

版

三

B6判
三五二頁
三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重宝なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 九〇〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 B6 二二〇〇円

国語史辞典 B6 一八〇〇円

日本語源辞典 B6 一八〇〇円

京都語辞典 B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B6 二八〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円

明治新語俗語辞典 B6 二八〇〇円

難訓辞典 B6 二二〇〇円

名乗辞典 B6 二八〇〇円

名数数詞辞典 B6 四五〇〇円

あいさつ語辞典 B6 二八〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 B6 五八〇〇円

類語辞典 B6 二八〇〇円

類義語辞典 B6 二八〇〇円

表現類語辞典 B6 二八〇〇円

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-3233-3741~2